

メーカーでの分析業務の過去・現在・未来



中山 茂吉

勤続年数に続き、日本分析化学会の会員年数も30年を超えました。入社以来、継続して化学分析業務を担当してきました。未来を思い浮かべながら過去を振り返り、^{ざっばく}雑駁に現在と比べてみます。

30年ほど前を「過去」とします。当時扱った装置の中、ICP発光分析装置のプラズマを点灯させるために、手動で大きな鉄製のハンドルを回しました。体力を要する仕組みに驚きました。イオンクロマト装置ではよく液漏れが起きました。若い頃は好奇心旺盛で、パーツを外して溶液の流路を確認しました。元に戻らず修理を依頼したこともあります。体を使ってシステムを覚えたものです。

入社当初、もの作り優先の環境のせいか、分析部門の立場は余り強くないと感じていました。現在、30年前には見えなかったものが鮮明に見え、放射光までが標準ツールとなりつつあります。立場が強くなったように思います。化学分析装置も能力および利便性が向上しました。一方製造現場では、滴定などによる管理分析が長年継続されているのを目にします。古典的な手法に改良を加えた上での技術移管も化学分析業務の一つと考えています。

プレゼンおよび論文（テキスト）について述べます。30年前は手書きからワープロへの変革期でした。現在パソコンが必須のツールとなり、明らかにプレゼン技術が向上しています。ただし若手の学会離れやテキスト作成能力が気になっています。良質なテキストを得るには、修正を繰り返す小まめな努力が必要です。これを怠ったまま管理職となり、部下が真似てしまうといった悪循環を懸念しているところです。私自身は、学会活動を通してテキスト作成技術などを取得できたと思っています。学会活動により社外の識者との人脈も形成できて、視野が広がります。私が担当となった近畿支部の近畿分析技術研究懇話会では、若手研究者を対象に奨励賞を設けています。応募される研究テーマの中味が濃く優劣の判定に大変苦労しています。分析化学の将来を支える方々が対象のため、ご担当の先生方は真剣に審査されています。

弊社でも最近「働き方改革」という言葉をよく耳にします。無駄の削減の一方、コミュニケーションの強化も要望されています。時間のやりくりには個人差があって、全社的に集約するまでには十分な議論が必要と考えます。30年前は、早く飲みに行くために、心の中では効率アップに努めたものです。最近は真面目な若手が多く、アバウトなアドバイスを差し控えています。

無論、メーカーでは会社の全体方針が最重要となります。その中で、若い方は上手く時間を調整して御自分の技術に磨きをかけて下さい。無駄な実験を省くためには十分練ったプランが必要です。学会活動もその一助となります。将来必ずそれなりの対価が還ってきます。周りで上手くサポートできる仕組み作りが必要と考えます。ここは、経験豊富な年長者の腕の見せどころですが…（未来?）。

〔Shigeyoshi NAKAYAMA, 住友電気工業株式会社, 日本分析化学会近畿支部常任幹事〕